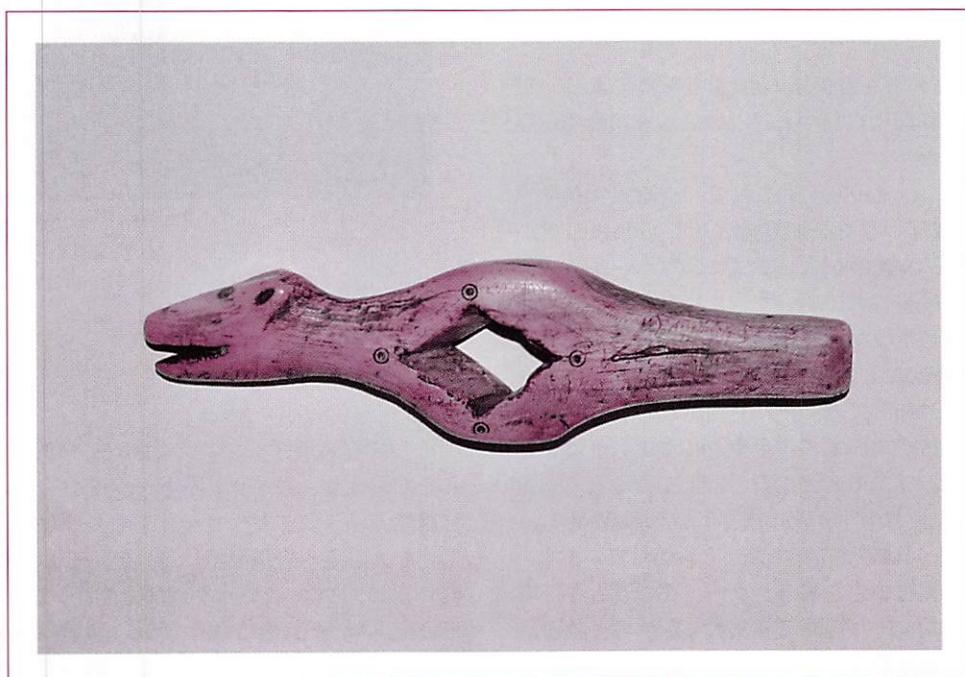




ISSN 0917-4729

北方民族博物館だより

No.80



H2.15 カリブー形マンモス牙製矢柄修正器
イヌイト アラスカ／ポートクラレンス 19世紀初期 13.7cm

斜めに彫り込まれた穴で、矢柄の曲がりやねじれを修正するために使われた。^{きば}牙や骨で作られた矢柄修正器は西アラスカ一帯にみられ、しばしば彼らにとって重要な動物であるカリブー（トナカイ）の彫刻が施される。カリブーのあいた口は、穴と一直線になっており、修正の目安となる。

- 1 表紙 カリブー形マンモス牙製矢柄修正器
- 2 池田カナ子写真展 驚き・シベリア・大自然～トナカイと過ごした夏
- 3 開館20周年記念企画展「北にくらす子どもたち」
- 4 講座「現在進行形！オホーツク文化の調査状況」
- 5 開館20周年記念講演会「北にくらす子どもたち」／開館20周年記念コンサート「遊牧の民のしらべ」
- 6 INFORMATION



北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

展示

池田カナ子写真展 驚き・シベリア・大自然～ トナカイと過ごした夏

2011.1.8-1.23

写真家・池田カナ子さん撮影の40点の写真により、東シベリア・サハ共和国の自然や人びとの生活を紹介する写真展を開催しました。

池田カナ子さんは、1980年生まれで、法政大学在学中より、ロシアを旅行し写真を撮り続けてこられました。2000年には「僕らは生きる」でエプソンカラーイメージコンテスト大賞を受賞されています。また今年度の北方民族博物館友の会季刊紙『Arctic Circle（アークティック・サークル）』の表紙とエッセイを担当して下さっています。

ロシア連邦内の共和国であるサハ共和国は、日本の約8倍の広大な面積を持っています。金やダイヤモンドなどの地下資源に恵まれ、マンモスの化石が出土することでも知られています。特に冬は零下70℃にまで下がる地域もあり、人間の住む土地としては世界で最も寒いと言われています。

展示は、サハ共和国の中心都市ヤクーツクの夏と冬、町から遠く離れた山岳タイガ地域で営まれるトナカイ牧畜、そして華やかな「夏至祭り」といったテーマごとに、構成しました。

レナ川のほとりにあるヤクーツク市は、ロシアという大国の一部でありながら、サハの民族文化が今も色濃く残るサハ共和国最大の都市です。緯度が高いために夏の日照時間は長く、大陸性の気候のため夏の気温は30℃を超えることもあります。「ヤクーツクの夏」のコーナーでは、明るい日射しの下、賑わう街や人びとの様子、街の風景などを紹介しました。

夏とは対照的に、冬は暗く、寒さも厳しい季節です。しかし、そんな環境でも人びとはたくましく生活してきました。「ヤクーツクの冬」のコーナーでは、白い霧に覆われて寒々としたヤクーツクの街、凍りついた魚やベリー類が売られる市場、冬でも元気な子どもたちの姿などを、おもにモノクロ写真で紹介しました。

サハ共和国はトナカイ牧畜が盛んな土地でもあります。「トナカイ牧畜」のコーナーでは、池田さんがたまたま滞在することになったトナカイ牧畜民のキャンプ地の様子を紹介しました。

そして最後の「夏至祭り」のコーナーでは、毎年夏至の時季におこなわれる夏至祭りの会場風景、鮮やかな民族衣装に身を包む女性の様子などを紹介しました。



トナカイに乗って、トナカイの放牧地に向かう
撮影：池田カナ子

ギャラリートーク

そして写真展オープンの1月8日には、撮影者の池田さんをお迎えし、ギャラリートークをおこないました。最初に講堂で、スライドやビデオをもちいながら、サハ共和国に住む人びとや自然環境について、そしてご自身がサハと関わるようになったきっかけなどを語っていただきました。その後、写真展会場に場所を移し、実際の写真を見ながら、写真の背景や撮影時の状況などを話していただきました。

ギャラリートークには20名の参加がありました。池田さんの暖かく率直な語り口に、参加者のみなさんも次第に引き込まれ、後半はたくさんの質問やコメントが出て、なかなか前に進めないほどでした。

(学芸グループ 中田 篤)

※池田カナ子さんホームページ

<http://www.ikedakanako.com/>



ギャラリートークの様子
池田カナ子氏（右）

展示

開館20周年記念企画展 北にくらす子どもたち

2011.2.10-4.10

当館は、開館20周年を迎えました。人間でいえば20歳で、日本をはじめ多くの国で成人の仲間入りする年齢です。博物館にとっても節目といえるこの時期に、あえて「子ども」をテーマとした企画展を開催することにしました。

これまでの特別展や企画展では、常設展示の内容を掘り下げ、あるいは補うようなテーマを選んできました。本展では、常設展示の最後のコーナーで展示している「子ども」「遊び」「現代」について、よりひろくご紹介したいと考えました。また、実物資料のほかに、多くの研究者・関係者のご協力を得て、北の先住民の子どもたちの写真をご提供いただき、展示しました。その大部分が、ここ20年のうちに撮影されたものです。以下に概要を紹介します。

子育て～乳児期や命名について

人間は未熟な状態で生まれ、赤ん坊はまわりの人間が世話をしなくてはならなければ、生きてゆくことはできません。社会の一員として必要な生活様式を身につけるまでには10～20年もかかり、次の世代の子を産み育てるまでも長い年月がかかります。子育てには共通点があるのはもちろんですが、民族による違いも見られます。例えば命名法。名前には魂が宿ると考え、熟慮して名前をつけることは共通しています。カナダ・イヌイトでは自分や近い人の名を受け継いで欲しい人が、妊婦に願い出る場合と、妊婦やその家族が、親族や友人のうちで亡くなったり、村を去った者の中から記憶に留めておきたい人の名を選ぶ場合があるそうです。一方、アイヌの伝統的な慣習では、同じ集落の人や、特に親族や知人との同名は避け、故人の名をつけることもしなかったそうです。

乳幼児の身を守るため、皮や布などでくるみ、板や容器状のゆりかごに縛りつける方法は多くの民族に見られます。持ち運べる大きさのゆりかごは、家の中や外で吊るして使われ、移動の際にも便利なものでした。一方、イヌイトの場合、幼い子は常におんぶされていました。カナダ・イヌイトの女性用パーカは背中に子どもが入るふくらみがあり、大きなフードにくるまれて暖かく過ごすことができるようになっています。こうした母親や子ども用の服、ゆりかごの実物資料とともに、ゆりかごで眠る乳児の写真なども展示しました。

学校教育について

北方の先住民族の生活は、移住者が増加するにしたがい大きな変化を余儀なくされました。多くの地域では、19世紀半ば頃から20世紀前半にかけて、先住民族向けの学校がつくられ、同化のための教育が行われました。子どもたちは、民族のことは話をすることが禁じられ、伝統的な生活から遠ざけられました。慣れない生活や流行病によって、命を落とす子どもも少なくありませんでした。1970年代ころからは、アメリカやカナダでは教育の権限を先住民の手に戻す動きが盛んになり、言語をはじめとする伝統文化を学校教育のカリキュラムに導入するところが増えてきました。学校での活動の写真とともに言語をはじめ、説話や美術などを学ぶための教材を展示しました。

アイヌ語教室について

北海道の例では、平取町二風谷アイヌ語教室子どもの部（講師・関根真紀さんら）の協力で、活動の様子を紹介しました。1983年に故・萱野茂氏の私塾としてスタートした同教室は、現在道内に14か所開かれていたアイヌ語教室の先駆けで、当初教室に通っていた世代が、今は親として教室に関わっています。ことばはもちろん、植物の利用法や刺しゅう等も学び、その成果をアイヌ語劇といったかたちで、地元や社団法人アイヌ協会の文化祭などで発表してきています。



また、展示室の一角に本の閲覧コーナーと、コマやお手玉、あやとりなどの北方地域とも共通するおもちゃで遊べるコーナーも設けました。二風谷アイヌ語教室子どもの部で講師役を務める尾崎由香さん制作の「アイヌ語カルタ」や、博物館実務実習生4名が作成した「神経衰弱」のように遊ぶ当館常設展示資料のカードも置きました。

本展の見どころは100枚を超す写真で、子どもたちの笑顔はどこでも同じであることとともに、自然のなかでくらすたくましさも感じていただけたと思います。また、カメラを持つ研究者たちが、フィールドで現地の人びととどのように接しているかも伝わってくるようです。

(学芸グループ 齋藤玲子)

講座

現在進行形！ オホーツク文化の調査状況

2010.12.11

講師 熊木俊朗氏（東京大学大学院人文社会系研究科附属
北海文化研究常呂実習施設 准教授）

本講座は、北海道を含む北アジア考古学を専門とする講師に、オホーツク文化の概説とともに、最近の調査成果や新しい学説をご紹介いただきました。以下に概要を記します。

北海道におけるオホーツク文化の展開年代は5～9世紀で、日本列島と大陸との北回りの交流史上の画期といえる。サハリンやアムール下流に起源をもち、海に適応し、クマをはじめとする動物信仰の見られることが主な特徴である。宗谷海峡周辺からオホーツク海沿岸に広がり、7世紀後半からの後期には地域差が大きくなった。展開の背景として、資源や人口の配分最適化、気候変動、周辺社会との関係の変化等の説があるが、一つの要因ではなく、これらが重なって起きたのではないかと考える。

最近の発掘調査の成果によって、従来の説とは異なる新たな知見が得られているのでそれらを紹介する。

オホーツク文化前期（5～6世紀）の礼文・利尻島や稚内など道北の遺跡から出土したものとをみると、この時期から北海道の在地集団（続縄文や擦文）との交流が活発であったことがうかがえる。たとえば土師器や、土器の材料となる粘土がオホーツクのもので器形が擦文という折衷の土器が出土している。現生ヒグマのDNAタイプと動物遺存体の比較調査から、礼文で出土した道南の0歳秋の子グマは、

贈与されたものと考えられることなどである。道北では漁撈が主であると考えられていたが、遺骨のタンパク質の分析から、海獣を主たる食料としていたことが示唆された。

オホーツク文化中期（7世紀前半）～後期（7世紀後半～9世紀末）に関しては、網走市の最寄貝塚や北見市トコロチャシ跡遺跡の近年の発掘調査の成果が注目される。1つ目は住居の建て替えパターンである。最寄では入れ子状や拡大・縮小、ずれて重なるなど多様な多くの建て替えが行なわれていた一方、近くのニツ岩では建て替えが見られない。他の事例とも比較して考えると、継続的に定住者がいた安定的な集落では建て替えが多かったといえる。2つ目は墓についてで、最寄貝塚では戦前の調査で推定200基、近年の調査で129基が見つかったが、その6、7割が中期のもので、後期後半の墓は少ない。墓数は、住居数に対してアンバランスであり、最寄が特殊な遺跡なのか、墓制の変化によるものか検討が必要である。3つ目は、こうした建て替えや墓の在り方を含め、中期の道東の集団は、前期の道北の遺跡とは異なる要素が多く、またサハリンや大陸とは共通する点も見られる。このことから、この時期には道北からの移動だけではなく、サハリンから道東へ直接、人が移動する動きがあった可能性が高い。

（学芸グループ 齋藤玲子）



参加者の質問に答える熊木俊朗氏（右）

第25回北方民族文化シンポジウム報告書

A4判 全64頁

昨年10月に開催した第25回北方民族文化シンポジウム「現代社会と先住民文化：観光、芸術から考える2」を発行します。

目次

浅川 泰「アイヌの装飾美術について」

クリスティン・ラロンド「生きることとイヌイトである

こと：イヌイト・アートにおける自伝と自己概念」

スタン・ベヴァン「伝説知 — 我々の未来への礎」

床 州生「チョッケナー アイヌ・アートの可能性」

貝澤 珠美「アイヌとモダン — アイヌ模様を今の時代に表現する一つの方法」

緒方 しらべ「ハイブリッドな生き方としてのアート 今日のアフリカンアートに錯綜する多彩な現実」

窪田 幸子「オーストラリア、都市アボリジニのアート — アイデンティティの闘争と抵抗、そして交渉」

坂巻 正美「作品『けはいをきくこと…北方圏における森の思想』 — 先住民文化探訪から彫刻概念の拡張へ」

大村 敬一「『社交の技術』としての芸術 — 『芸術』と『伝統文化』を超えて」

質疑応答および討論について

開館20周年記念講演

北にくらす子どもたち

2011.2.11

会場 オホーツク・文化交流センター

講師 岡田 淳子（当館館長）



開館20周年記念講演として、当館第4代岡田淳子館長による講演会「北にくらす子どもたち」を開催しました。以下に講演の概要を紹介します。

まずはじめに、映像『アンゴテ：エスキモーの少年の物語』の一部を上映しました。この映像は1953年にカナダ国立映画制作庁によって撮影された、イヌイト・ネツリックの再現ドキュメンタリーです。

講演の内容は、北に暮らす子どもたちの特徴や、ジェンダー（男女の社会的・文化的役割、違い）がどのようにして形作られてきたか、学校教育が北の子どもたちに何をもたらしたかについて、主にイヌイトと北西海岸インディアンに関しての、講演者のこれまでの調査と豊富な事例から紹介するというものでした。

「北方地域の暮らしの特徴、子育ての特徴」としては、北に暮らす子どもたちは自由に、のびのびと育っており素直であり、先輩や自然から学び、身を守ることを覚えてゆく。5歳までは生活の基本を見習い、11歳からは大人の仲間に入る。イヌイトの精神力の強さを示すエピソードとして、氷の上で流されても生き延びようと、あきらめないことが挙げられました。そして「ジェンダー」については、ジェンダーは生活の中でストレスなく生きられるように選択されるものであり、社会が変わればジェンダーも変わることが説明されました。「学校教育の影響」として、学校教育が定住生活を進めたことや、数や時間を知らなくても生活できた彼らが、学校で初めて数と時間を認識した事例が指摘されました。

会場には大勢お集まりいただき、具体的な子育てのことなどについての質問がされました。

（学芸グループ 笹倉いる美）

開館20周年記念コンサート

「遊牧の民の調べ」

2011.2.20

出演 リヤス＝クグルシン氏

ドルジパラム氏

西村 幹也氏（当館研究協力員）

モンゴルの伝統楽器・馬頭琴と、カザフの伝統楽器・ドンブラの演奏者を招き、開館20周年の記念コンサートを開催しました。

馬頭琴は日本では絵本『スーホの白い馬』で知られるようになった、棹の先に馬の頭の彫刻がほどこされた弦楽器です。ドンブラは、胴体が涙形をした、二本弦の楽器です。

コンサートではまずはじめに、当館研究協力員の西村幹也さんに、スライドを使ってお話していただきました。開催中の企画展「北にくらす子どもたち」に関連し、特に子どもたちの暮らしや育ち方を中心に、モンゴルの自然や伝統文化、少数民族としてのカザフについて紹介いただきました。

次に西村さんの司会・解説により、カザフ民族出身のクグルシンさんのドンブラ演奏と歌、モンゴル民族出身のドルジパラムさんの馬頭琴演奏と歌、物語、そして両者の合奏・合唱の順で公演をおこないました。

コンサートには、網走市内や近郊地域から90名を超える方々にお越しいただきました。予想よりも多い来場者に、会場はちょっと窮屈になってしまいましたが、お二人の演奏には熱が入った様子でした。

日本では聞く機会が少ないドンブラや馬頭琴の音色、カザフ、モンゴルの曲のメロディー、そして色鮮やかなそれぞれの民族衣装に身を包んだお二人の姿にも、多くの方が満足されていました。

（学芸グループ 中田 篤）



左 ドルジパラムさん 右 ドンブラ奏者リヤス＝クグルシンさん

展示のお知らせ

開館20周年記念企画展

『北方民族博物館20年のあゆみ』展

平成23年4月23日(日)～6月26日(日)

会場 北方民族博物館 特別展示室 観覧無料

旭川市博物館第62回企画展・

北海道立北方民族博物館共催

『イヌイトの壁掛け展

— カナダ極北のあったか手仕事』

北方民族博物館が所蔵する、カナダの先住民イヌイトの工芸品である、壁掛けとお人形を展示し、北方地域で培われてきた暮らしの知恵と美を紹介します。

平成23年4月29日(金)～5月29日(日)

会場 旭川市博物館特別展示室

観覧料 有料



研究紀要20号

B5判 144頁

I.A. カラペートヴァ (ロシア民族学博物館)・

荻原眞子訳「ロシア民族学博物館所蔵のクマ祭資料
—オビ・ウゴール(ハンティ、マンシ) 篇—」

久保田 亮

「歌の帰郷—民族誌的資料の「返還」と「活用」に向けた
取組みについて」

風間伸次郎

「ツングース諸民族の口承文芸について」

田村将人

「ニヴフ語調査に関する樺太庁敷香支庁土人事務所と
の往復文書」

上西勝也・笹倉いる美

「明治中期の北海道庁測量標石「網走天測点」

山田祥子・笹倉いる美

「北海道立北方民族博物館所蔵のウイルタ資料Ⅱ」

中田 篤

「ロシア・サハ共和国におけるエベンのトナカイ放牧技法」

渡部 裕

「ロシア／カムチャツカにおける日本漁業とソ連漁業
の関係—日本人漁業は何をもたらしただろう—」

笹倉いる美

「のりすくと2010」

INFORMATION

行事報告

◆12月18日(土)に、はくぶつかんクラブ「フェルトでつくるモンゴル風コースター」(講師：石原生久代解説員)を開催しました。

◆12月19日(日)に『ロビーコンサート2010 青少年のための室内楽の夕べ 20th メモリアルコンサート』(演奏：札幌交響楽団員)を開催しました。



◆1月15日(土)に、はくぶつかんクラブ『大昔のアクセサリ、ピカピカのまが玉をつくろう』(講師：日比野美保解説員)を開催しました。

◆1月16日(日)に学芸員講座『東シベリア・サハ共和国のトナカイ牧畜』(講師 中田篤学芸員)を開催しました。

◆2月11日(金・祝)はくぶつかんクラブ『雪あそび&スノーシュー』(講師：菅原章子解説員ほか)を、北海道立常呂少年自然の家との共催で開催しました。



◆3月4日(金)、5日(土)に『ビーズ細工』(講師：笹倉いる美当館主任学芸員)を開催しました。

◆3月12日(土)学芸員講座『ウイルタ文様の秘密』(講師：笹倉いる美主任学芸員)を開催しました。

学芸員実務実習

◆2月1日(火)～6日(日)の日程で、博物館実務実習を行い、4名の大学生を受け入れました。



北方民族博物館だより No. 80

平成23(2011)年3月25日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
電話 0152-45-3888 fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
財団法人北方文化振興協会